

物の関係と三様の人間

満洲日日新聞主催学術講演会 大連にて

夏目漱石

着想を得ること

今回の旅行はただ満洲の見物、遊びということに過ぎぬから至つて閑散な旅行のようであるが、その実私に取っては見ることに聞くことにこれ日も足らず、という有り様で非常に多忙である。ところが満洲日日新聞社長の伊藤君から何かやれという話であつて友人の間柄でもあるしやってみようとはいつたものの、さてこれという着想おもひごともない。元来思い付きを得ることは大分困難のことで、人の考えたことをいい加減に焼き直して話をするとか、または書物にある事柄をそのままおたやす話するというようなことなら易いことであるが、しかし人にも話し、人に聞かせたいということとは、そう毎日ピコリピコリと出て来るものでない。また、たとえ吾人の脳裏に電光

のごとく閃くことがあつたとするも、これを一々そのままいうことは聞く人にとって解せられるものでない。それで人をして判明せしむるように話すためには、英語でいうとElaborateすなわち思い付きの浮かんだものを飴細工見たようにダラシなく引き延べて話さねばならぬ。ちようど学校の講義だとか外国の書物などによくある通り、判り切つたことを幾度いくたびも繰り返す。もう大抵でよせばよいと思うほどに、馬鹿馬鹿しくくだらぬことを明細に説明している。しかしこれは事理を人に知らしめんとするには、皆このようにせねば人をしてよく理解せしむることができぬからであつて、自分の思い付きを人に知らしむるためにはぜひ必要なことである。単にその骨子だけをいうても、解せらるるものでない。で、世間に「君のために自分を侮辱するとき演説はできぬ」ということが用いらるるが、

これは講演を依頼した人のためにこれを引き受けて演説する、そして充分説明するには面倒であるからいい加減に話しておく、ところが聞く人にはサッパリ判らぬ。また自分もよさそうな思い付きが浮かんでから話したのでもないから、聴衆一般は「何だグータラベーなことをいう奴じゃ」とつまり自己を侮辱するわけとなる。すなわち自分で言ったことのために自己の価値を落とすものであるから、講演だの演説だのということは面倒臭いものであるといわねばならぬ。ただしこの面倒臭いはむしろ善意の面倒臭いである。

顔覚えの講演

私は内地にいた時分はあまり外出しない方で、演説なんて一向や

らぬ質たちであるのみならず、話のできるだけの考えも無ければElaborateも浮かんで来ないのであった。しからは今夕はどうだという問題だが、大連に上陸したため空気の工合がよいので、急に頭が明晰になって諸子にある事物を理解せしめようということになったのは素もとよりないので、伊藤君から持ち掛けられた依頼を、ウン何かやってみようかと半分は自己の軽率に引き受けたことと、半分はやむを得ずにとりとうこういうことになってしまったので、初めはお伽話でもしようかと思つたのが講演となつたものである。しかし講演といつても単に顔覚えぐらいに過ぎないのであるから、諸子がもし内地にお帰りになつて出遭つた節お思い出しになるくらいのものであろう。

渡満は風の吹き廻し

さて満洲というところは来て見て驚いた。内地ではこんな良いところとは思わなかったのである。それで内地では避暑といえは温泉だとか海水浴だとか、また富士登山であるとかずいぶん費用も安くてできることがたくさんあるのに、平生外出嫌いの者が何故に満洲などへ来たかというに、それは判然としない。ただどういふ風の吹き廻しかこちらへ高飛びしてしまった。つまりただ来たかったから来たのに過ぎないから、どうせ立派な講演なんかできようはずがない。私は満鉄の中村総裁とは懇意の間柄であつたので、一体満鉄なんていうところは何するところだと聞いたら、貴様は馬鹿だ、それより満鉄の経営はどんなことしているか、日本人の活動はどういう

風かを見て来いということになって、外出嫌いの私が見聞のためかつ後学のため満洲まで来るようになったので、実は総裁と一緒に来るはずでしたが胃病のため医者に止められて、とうとう九月二日東京を出発し、神戸から乗船して海上四日、その間天候も極めてよく船嫌いの私も何の故障もなく、以前外国へ行ったときは半死半生の有り様だったが、今回は渺茫ひようぼうたる海上、まるで青い原でも滑って行くが様に朝鮮沖の景色の佳よいを見て大連に到着し、すぐと中村総裁の宅へ来た。ところがその晩ウイスキーを飲まされてまた胃を悪くし、翌日馬車でいろんなところを見物した末、西洋料理などでますます損じてしまった。

一着の洋服

満洲ではまず何を一応見ておくべきか、ということは大いに惑うところで、十分に研究否な拝見するには少なくとも十二ヶ月を要するのであるが、何分着物が御覧の通りこの服一つ切りだから、この服の通用期間内に満洲の北部から朝鮮に出て帰ろうという考えである。で、別に満鉄の請負で儲けようとかいう考えはさらになく、ただ見聞に追われている次第で、そのため寸暇もないからお話する余裕がないのである。しからば私は余裕がない人間であるかというに、大いにある。ただそれが電光の閃くひらめがごときもので、これをElaborateして、組織的 (Systematic) に講話するにおいて、その電力がはなはだ薄弱であるというわけである。

同胞は何をしているか

満洲ことに大連は南満洲鉄道の起点であつて、世界の交通機関として欧州より東洋に到る鉄道の終点である。すなわち鉄道の起点でまた終点である。しかして日本人の多数が住居して、鉄道沿線にもまたずいぶん多くの日本人が生活を営んでいる。これらの日本人は何をしているかというに、いうまでもなく満洲の経営をしているのであつて、富源あらばこれを開拓し、これを経営するためであるものである。このほかに教育家とか医者とかいう人もあるが、大部分は富源を開拓せんがために満洲に来てゐる者である。しかればその開拓をいかなる風にやっているかというに、大連に上陸してわずかに四、五日のことであるから我々素人には判りかねる。諸君

の方が三年四年ないしは五、六年と満洲に住んでおられるから、私よりもよほど古参でかつまた各般の事情には私以上に精通しておられるが、しかし日本人の多くは満洲の経営、富源の開拓に來ているもの、すなわちそういう傾向—Interest—をもっているものと定めておこう。

社会の面白味

しかし私は富源の開拓に力を致して儲けを得ようという考えもなければ鉄道で豆を運んでウント運賃を取ってやろうとか、石炭をどうしようとかの考えもない。ここに至ると同じ人間でもずいぶん大した違いがあるもので、私は宅にいてゴロついておればよい、到つ

て金儲けには縁の遠い商売であるが、諸君は刻一刻活動して満洲の開發に力を尽しておられる。これはずいぶんの差異ちがいである。いわば極端と極端とが生存しているかのようであつて、しかもこれがまた社会の面白いところである。私は、三、四年前あるところで講演を依頼された。その時、学理より論じて人間がいかなる分布發達をするものであるか、なんて生意氣なことをお話ししたことがある。これについて少しく述べてみようと思う。もとよりわずかの時間であるから、全部申し上げることできないから、まず前にもいった通り顔の見知り合いぐらいに、その中途から述べることにする。

人間の三種

さて人間には三種ある。かくいうと小学読本にでもありそうであるが、マアとにかく三種あつて、第一は物と物との関係を明らめる人、第二は物と物との関係を変化せしむる人、第三は物と物との関係を味わう人、の三種に区別分類せられる。この三種の分類をいかにして定むるかということについては、精密なる論究の経路を経て後この結果を得るものであるが、これは略してこれら各種の人間について述べようと思う。

物の関係を明らめる人

第一、物と物との関係を明らめる人とはどういう人であるかというに、色々の関係を常に研究している人で、例えばここにある机テーブル、

の実際においてその要素—Factor—において差異がある。例えば満鉄会社の社員は鉄道屋で、汽車を運転せしむる、豆を運ぶ、石炭を掘る、そしてこれを売る。また軍人などは、敵を攻撃して敗北せしめる、敵兵を殺すなど、これらはいずれも第二の分類に入れられる人である。

物の関係を味わう人

第三、物と物との関係を味わう人というのは例えはこの卓子テーブルの上にある茶盆を中央に置いて眺める。色々な感想が起こる—面白いなア、あるいは小さなものだ、色がよい、ケチナ土瓶だなア、てなことすなわち物と物との関係を味わってるのである。この点から

いうと、愚にもつかない山を崩して鉄道を敷くとか、せつかく生えてる木を切つて薪にする、とかいうことは第三種の人間から論ずると一向感服しない（中村総裁、国沢副総裁その他重役達の席を顧みて言う）。しかし、以上の三つの関係—Relation—を明らかにするは至つて面白いことで、人間としては必ずこれらの幾部分ずつを兼ねなければならぬものである。ただ一つのみの人間では、社会に立つて行くことはできぬものである。年が年中馬が走るのみを味わつていてもつまらぬもので、ある程度までこれら三者を兼備しなければ、人間としての価値はないものである。例えば、物と物とのある関係を変化せしめてこれを楽しむ—Enjoy—する。小説でいえば男と女とがいかなる関係にあるのか、クツツイたのか離れたのか、その関係が明らかに判らないで、アア面白い、実に愉快だなどとはい

えるものでない。また二、三日前私は旅順に見物に行つて、二百三高地から東鷄冠山等ひがしけい かんざんの砲台に案内された。陸軍大尉の説明するには、向こうの山に眼鏡を据え付けて、日本軍が上陸するのを見たという話であつた。それで大連はどの方角ですかと尋ねると、こつちの方だとの答えだ。私は全く方角を誤っている。聞いてみると、大連から来た汽車の線路が廻つておつたのであつた。その翌日は、少尉の人に案内してもらつたところが、昨日聞いた山だとか砲台の位置が全く変わっている。これらは物と物との関係を明らかにしなかつたから、こういう間違つた考えが出たのである。で、もし私のごとき者が旅順を攻撃しようとしても、到底できるものでないと大いに悲観したわけです。軍人は敵を攻め敵を殺し得るといつても、その初め、物と物との関係を悉しつち知しておらねばならぬ。鉄道を敷くにも、

また隧道トンネルを穿うがつにも、無暗むやみに堅いところをカチンカチンやっても駄目なもので、よく前後の関係を明らめねばならぬ。また物と物との関係を変化させ、あるいは変化させたいと思いかつ三者を兼用し活用せしめて、いよいよ自分の目的は、というところになってそれぞれその趣を異にせしむるものである。

趣味眼しゅみがんに映ずる万象

もし私をして文学者の内に属せしめたならば、物と物との関係を味わう人の部類である。汽車は面白いものである。石炭を焚いて、それが煙となって煙筒から出て行く。その煙が色々の形に変化して行く。まことに汽車というものは面白いものである。汽車といえば、

英国の美術家に「ターナー」という人がある。その人が汽車の絵を画いた。それは、軌道^{レール}が水に浸されたところを汽車がやって来る有り様を写している。しかもこれが名画の一として称揚せられている。またドイツのある美術家が絵を画くために米国へ行ったが、その絵は一種異様のものばかりで、製造場だとか工場であるとか、さては船渠^{ドック}、五本も六本も突き立った大煙筒、大廈高楼などで、我々から見ると何だか俗なものだと思つたところを、立派に美術化させて奇麗に画いている。これらはすなわち味わう人である。しかし味わうばかりでは済むものでない。物の関係を明らかにせざる我々といえども物と物との関係のある程度まで、明らめたいものである。しかして物と物との関係を変化せしむる人、すなわちChangeする人もまた同様で、これら三者は平素の行動上あい併備せねばならぬ。そしてあ

る特殊の場合において目的を定め、後の二つを予備としておかねばならぬものである。

無暗むやみに忙しい人々

私が埠頭に上陸して第一に見たのが、築港の模様である。ところがそれはまだ半成であつて、せつせと運んでいるということである。それから大きな上屋うわやがある。何でも二個師団ぐらいは充分収容れることができるといふ話。その次に豆がたくさん積んであつた。一体に埠頭から上陸しますと焼原やけつばら見た様ですね。次に電車の線路が敷いてある。それから大きな煙筒が見えている。発電所も盛んにやつていゝる——中央試験場もある。そこで柞蚕さくさんから立派な糸を作るとか、織

物ができるとか、高粱こうりょうからウイスキーを醸造つくるとか、大分景気がよさそうに見えて、満洲経営も大いに楽観せしむるようである。そして大連にいる人たちも血色よく、至って元気で結構。電気公園はスバラしいもので、諸種の配合もよく取れているが、今少し金を掛けたら一層よくなるだろうと思われる。物の関係を味わう側の者からいわせると配合はよいがただ実質をも少しよくしたい。しかし欧米の粹を抜いての電気公園ができるのだから、見事な物になるでしょう。ことに露西亞ロシヤ町などは中々奇麗なもので、ヤマトホテルも立派で、私などが宿とまっているにはよすぎるようです。総裁などのところになると、大きなDancing Room（舞踏室）もある。私なんか、あんな広い見事なダンシングルームは初めてである。総裁も満洲に来ておればこそ、あんな立派なところに住まわれるものの、内地では中々

できることでない。これでこそ満洲に來た甲斐がある、というものである（総裁を顧みて言う）。しかし、ただ満洲を開拓する人といつてもたくさんの仕事がある。豆を運ぶ、石炭を掘る、電車を通わせる、電灯をつける、電気公園を作る、公園を立派にする、射撃場を設ける等、新開地はなすことすることが多い。これが東京であつてみると中々そうゆかん。モ―すでにある程度まで發達しているのであるから、それ以上の進歩は徐々として進むのである。私でも上等の家に入りたいが、しかし私は豆を売るでもなし、石炭を掘つて売り出すということもせず、それで金儲けもできぬから、きたない小舎こや見たようなところに住んでいる。もし希望に任せてやったなら、ほとんど停止する所がないもので、結局欧米における第一等国の粹あつを錘めた点に至つて止むの外はない。こういう風で、満洲も Materi-

二 (物質的) のものが漸次進んで来るでしょう。それで私が今満洲に来て色々の事物を見聞しているがごとくに諸子もまた私と同様の觀念ではなからうかと思わるる点がある。それはいかなる点であるかというに、私は旅行の日程に限りがある。前にもお話ししたようにこの洋服一着の通用期限内に東京に帰らねばならぬ。しかもその上に金に制限がある。故に気がセカセカして、早くたくさんの用を便しようとする。すなわち甲が未だ充分明らかにならない内に乙に移る。乙を明らめずして丙に転ずる。頭がまるでCyclic Orderに転々循環して進んでいるのである。これと大連および諸子の状態があるいは似寄ったところはないだろうかと思わるる。元来新開地の新事業というものは、どこまで行って止むか、ちよつとその停止の時機が来ないのである。あたかも囲碁のように、一つの石を下して

次の石に移り、さらにまた後の石を下さんとするので、金の運転の
できる限り、新事業新設備は踵きむすを接して起こって来るのである。そ
の間に諸子の生活し生存しその事業を幫助し、かつこの間において
物と物との関係を変化せしめんと欲して生活している。その諸子の
精神状態は、Restless (休息なし) に烈しく落ち着きがない。飯
もろくろく食えない、という人があるかどうかそれは知りませんが、
とにかく多忙で次から次に移って行く。事物をよく含味する暇がな
いという点において、私が満洲見物に來たのと同様の状態にありは
せんかと想像する

新開地に少ない人間

元来、この物から次の物に移って行くのは非常に早く進むものだが、その関係を究める、すなわち中央試験所におけるがごとく、この物をどう変化せしめよう、この物とこの物との関係はどうである、しかしてこれより利益を得、金儲けをするにはこうすればよい、などのことを究める人は千人に一人ぐらいで、物と物との関係を究める人はことに新開地においては少ないものである。同時にこれを味わう人も少ないのである。

憐れむべき人

物と物との関係を味わうということは、あるいは自己以外の人に解せられない場合がある。それで物の関係を味わうことを、何の必

要なるものかと聞く人がある。かくのごとく味わうことのできないこれらの人は、私をして言わしむれば、むしろ憐れむべき人だといわねばならぬ。私の友人がドイツに留学している時分に、その宿の婆さんから日本人は誰でも音楽を味わうことができるかと問われて、イヤ皆が皆これを味わう者ではない、現に自分も音楽は解らぬと答えたとところが、婆さんはそれでは一種の不具だと言われた。なるほど音と音との階梯を味わうことのできない、一種の不具に相違ない。しかし本人は、今もってこれを苦にもしていない。これらは例えていえば、自分の好きな牛肉を嫌いという人があるなら、こんな美味いものを食うことができないとは、さてさて気の毒なものだといわねばならぬ。一方が好きなものを一方が嫌いだとすれば、これを第三者の地位にあつて評する時は、嫌いという方は気の毒というより

外はない。この人生の生活激甚なる—Intensity—の現状において、人の味わうことのできるものを味わい得ぬとは、誠に憐れむべきものである。しかし生活そのものにおいて本当に味わうことのできる者は、自分より外に自分の生活をそれ以上痛切に味わい得る者はない。しかしこれをなしくずしに、一年でも多く生きた者が人生を多く味わい得るものとのみ限つたものではない。ある意味からいえば、それで人生すなわちLifeを味わうことについて、ある人は宗教をもつて来、ある人は文学、芸術等により、単調なる生活を趣味多く多角形に変化せしめて味わうものである。

物を味わう時代

しかるに、大連のごときところにおいて、事物の送迎に閑ひまなき、ちやうど私が満洲見物に來たような状況で、はたしてこれらを味わう暇があるかどうかは、はなはだ疑問とするところである。恐らくこの大連が物質的發達に、これ日も足らずしてあたかも欧米の粹を抜き、これとあい並馳へいちするまでは、決して止まざるべき進歩の間においては、必ずや充分物と物との關係を味わうというがごとき落ち付きあることはまずできまい。かの米国のごときは新進の国であるから、この物質文明の送迎に力を致しているので、国の進歩している割合に音楽家とか文学家とか、または美術その他の芸術家という者は、充分に輩出しておらぬ。しかし金が多いために、我国よりは發達している。つまり米国がその單調にして趣味——物と物との關係を味わう——に不足を感ずるに至り、近來しきりに研究學生を海

外に派遣している。大連もこれと同過程にあるものである。物質文明に追われて送迎に^{いまま}違なきその第一期を経過し、ついで第二期に入り落ち付きもでき初めてようやく物を味わう、すなわち角度を多くして味わうという時代に移るものである。そしてその時に到って私のやつてる仕事、または私共の仲間の仕事が味わわれるに至るものである。ずいぶん間遠い仕事であるが、その時機において私共の演説だとか講演だとかが、初めて耳を傾けらるるものであるから、その時に演説でも講演でも致すこととしましょう。

二博士の大発見

先般白鳥博士が来られて歴史の研究をされた。博士は歴史専門の

学者であつて、歴史そのものは科学—Science—で物の關係を明らかにするものの内に属する。何でも満鉄から金を出したのらしいが、物と物との關係を明らかに何の役に立つか。満鉄—鐵道屋として何になるか。今夕は中村総裁も来ておられるから満鉄に關してのことも言うが、元來満鉄なんていうものは鐵道屋だから、豆を運んで石炭でも掘っておればそれでよいのである。しかして白鳥博士は何でも金の都の碑を發見して、その所在地を確かめられたそうである。ところで満鉄としての事業に、金の都を發見したからとて何の役にも立たぬ。つまり鐵道の事業としては何等の關係はないが、しかしこの学者をして物の關係を充分に明らかに得させたということ、満鉄がこの單調なる滿洲の生活をしてその單調を破つて角度多くしたものである。金の都の碑を發見し、その所在地を確かめたというのは、

歴史上の大発見である。しかし門外漢から見ると、うまいこともなければ金儲けにもならぬ、下らない何の価値もないものである。しかし白鳥博士に取っては、これらの関係を明らかにするが専門であるからしてまことによいことで、また社会のために悦ぶべきことである。これらはどうして発見し研究しその関係を明らかに得たかというに、満鉄の仕事―豆と石炭の煙とが明らかめさせたのである。これらの関係を味わうのもまた実に面白いことで、石炭の煙とか大豆とかが港を作ったり学者に大発見をさせたり、物を変化―Change―させたりするようになる。それは面白いことである。また近くは橋本さんも来られた。この人は札幌農学校の教授であつて、白鳥博士をたす助けたり、また自身では畜産学の専門家であるから、その専門の研究をされたそうだ。しかし、その専門の牧畜で儲けようというような

商売人ではない。また金儲けのために来られたのではない。蒙古の牧畜を視察しに来たのでこれも満鉄から金を出したということ。そして白鳥博士以外に物の関係を明らかにされたのである。これらは、電鉄も敷かねばならぬ、電気公園も作らねばならぬ、まるで大連が火事場見たようなその取り込みの場合に、この単調なるものを変化せしめて多角形にしたのは感心である。

商売以外

第三は、私見たようなものであるが、ただしその数にはちよつと入り兼ねる。私は、諸君がどういう風にしていらるるかを見に来たに過ぎないのである。さて満洲の主な事業といえば満鉄である。そ

してその事業は豆の運搬、撫順炭ぶしゅんの採掘、築港等はなほ多方面である。しかしてこれに付属してまた種々の仕事があつて、まことに多忙である。その間にあるいは白鳥、橋本の両博士などの、石炭にも大豆にもはたまた埠頭の事業にも関係のない人を迎えて、充分物の関係を明らめしめ、満鉄自己の商売以外の部類に属する人に利益を与うる人と呼んで、もつて満洲の生活を多角形となしたというのは、賞するに足る次第である。

複雑なる生活

終わりに、諸君は常に満洲の経営に任じて、その事物を變化させつつ進む内にも、物と物との関係を明らめる人、あるいは関係を味

わう人等にも接するに至るが故に、諸君の生活は漸ぜんをもつて円滑となり、近くなんらかの反対が起こつて複雑なる生活に移り行くであらう。しかし、ただにその機をのみ俟またず、それ以前にすでに前述分類の三者を兼ね備えるは、これやがて諸君の幸福となるべきものであると信ずる。言意充分に尽すを得ないが、諸君これを諒りようせられたい。

※ 明治四十二年（一九〇九年）九月十二日午後七時から、兎玉町満鉄従業員養成所にて行われたものを、主催者の満州日日新聞社の記者が記事のために活字化したもの。

【出典】朝日新聞社『論座』二〇〇八年九月号。同誌にて、新漢字、

現代仮名遣い等に改めています。

韓滿所感

滿洲日日新聞掲載

夏目漱石

満州日日新聞 明治四十二年十一月五日

韓満所感（上）

東京にて 夏目漱石

昨夜久し振りに寸閑を偷ぬすんで満州日日へ何か消息を書こうと思ひ立って、筆を執とりながら二三行認め出すと、伊藤公が哈爾賓ハルビンで狙撃されたという号外が来た。吟爾賓は余がつい先達せんだつて見物に行つた所で、公の狙撃されたという。フラットフォームは、現に一ヶ月前に余の靴の裏を押し付けた所だから、希有けうの凶変という事実以外に、場所の連想からくる強い刺激を頭に受けた。ことに驚ろいたのは大連滞在中に世話になったり冗談を云つたり、すき焼の御馳走になつたりした田中理事が同時に負傷したという報知であつた。けれども

田中理事と川上総領事とは軽傷であると、わざわざ、号外に断つてある位だから、大した事ではなからうと思つて寝た。今朝わが朝日所載の詳報を見ると、伊藤公が撃たれた時、中村総裁は倒れんとする公を抱いていたとあるので、総裁もまた同日同刻同所に居合せたのだという事を承知して、また驚ろいた。

伊藤公が、余と関係の浅からざる満鉄の線路を經過して、余の知人と同乗同車の末、未だ余の記憶に新なる曾遊の地に斃れたのは、偶然のでき事ながら、余に取つては珍らしき偶然のでき事である。公の死は政治上より見て種種重大な解釈ができるだろう、また単なる個人の災害と見ても、優に上下の視聴を聳かすに足る凶変である。従つて向後数週間の間は、内地の新紙はもちろん滿韓の同業記者もまたことごとく筆をこの一変事にあつめるに違ない。ただ余の

ごとき政治上の門外漢は遺憾ながらその辺の消息を報道するの資格がないのだから極めて平凡な便りだけに留めて置く。

滿韓滯留中は諸方で一方ならぬ厚意を受けて、至る所愉快と満足をもつて見聞を了した。これは、余の深く感銘する所である。余は余の消息のこの一機を利用して、滿州日日の紙上により改めてわが在外の同胞諸君に向つて、礼謝の意を公けにしたいと思う。

ことに今度の漫遊中に余は朋友知人の難有味ありがたみを深く感じた。平生は無精と忙がしいので、殆んど便りもしないものが、自分の親類か何ぞの様に、快よく世話をしてくれる。親切に迎えてくれる。殆んど気の毒な位のものであった。幸に余の知人は滿韓にあつて、皆相應の地位を得ているもの許であつたので、なおさら特殊の便宜を得た。不断は離れているから、御互が記憶の中から消えているのは自

然の勢であるが、こうやって遠くへ旅行して見ると、始めて友達の難有味ありがたみが分る。重要な地位にある友達から金を借りる見のない余も、彼所あそこ此処ここで懇ねんじろな厄介えきがいになった時は、やはり友達に限ると思つた。

満韓を経過して第一に得た楽天觀は在外の日本人がみな元氣よく働いているという事であつた。内地のものは大概おお蒼い顔をして多くは滅入めいじゆている。意氣いき銷沈しょうちんと神經衰弱と、失望と不平は至る所に伝染している。満韓の同胞にはそんな弱い痕跡が見えない。一言にしていうと、皆元氣旺盛で進取の氣象に富んでいるらしく見受けられる。どこへ行つても、自分の經營している事業や職務について、懇切丁寧に説明してくれる。しかもその説明の内容は大部分改良とか成功とかいう意味のものであるから、おのずから得意の色があるはずで

ある満韓で逢った人で、もう駄目だから内地へ帰りたいたいなどといったものは一人もない。皆その業務に熱心である、これは内地と違って、諸種の経営が皆新らしいので、若い人の手腕を揮う余地のあるのと、小舅（いせうじう）の様なものが、干渉がましい事をいわずに、万事放任主義で全体を当事者に一任してあるから、当事者の意見が着々実行できるのと、最後にはその実行に対する報酬が内地の倍以上に高価に仕払われるからであろうと思う。韓国での話に、此方（こっち）の巡査は五十円程になるから、晩に麦酒（ビール）の一杯も飲める。しかし内地へ帰ると十円内外の月給に切り詰められて苦しくって堪（たま）らなくなるので、また此方（こっち）へ来たくなるんだと聞いた。この経済的余裕は満韓の上下を通じて、大いにわが同胞の頭に影響している事と考えられる。

満州日日新聞明治四十二年十一月六日

韓満所感（下）

東京にて 夏目漱石

余は個人の経済事状をもつて、個人の幸福に至大の関係を有するものと信ずる一人である、満韓在留の同胞の生活程度が、内地人のそれに比して比較的高いのを目撃して贅沢ぜいたくだなどとは決して思わない。かえつて内地に醒あく齷せくする我々が気の毒でならない位である。余が満州日々の依頼に応じて一場の講演を試みた際、背後にある中村総裁を顧みていくら総裁だって内地ではあんな立派な家うちへは這入れませんといったが、これは親友の間柄、当座の冗談に過ぎなかつた

のは無論の事であるけれども、これに意味を付けて解釈すれば、総裁が贅沢だと判するよりも、内地人がシミツタレだと翻訳する方がむしろ適当である。大連にある総裁の社宅はロシアの技師長とかの家だと聞いている。満鉄の総裁がロシアの一技師長の家へ這入って贅沢だといわれる様では、日本も外聞のわるい程希知な国になってしまう訳である。否余は田中理事の家に這入って、その書齋やら応接間を見て、理事の居宅としてはむしろ狭過ると思つた位である。外国人を連れて来て見せたら、これが堂々たる日本の大会社の理事の住居かといつて驚ろく位のものだろう。朝鮮で余が一週間程厄介になつた知人の官舎は新築で西洋間が四つ程ある。その木口をよく見ると、鴨緑江材に漆をかけたもので、余にいわせるとむしろ粗末である。窓掛や敷物に至つても決して整つてるとは評せられない。

それでも人は立派だ立派だ、と嘯していた。余は局長としての主人が、朝鮮迄来てわざわざこんな家に押し込められたのをかえって気の毒に思った。公平に言えば、我我中流の人士は誰でもこの位な家に住んでしかるべきであらう。余の東京早稲田の借家は、これに比して遙かに劣っている。けれども自分は日本の中流の紳士として、今よりは倍以上に立派な邸宅を有してしかるべきものとの観念を常に有している。この主人はまた馬を二頭飼っていたが、これも内地から来たものが、見たら喫驚の種かみかも知れない。が、馬を二頭飼う局長が珍らしい様では、日本人の胆きむもまた小なりというべきである。歴遊れきゆうの際もう一つ感じた事は、余は幸にして日本人に生れたという自覚を得た事である。内地に跼蹐きよくせきしている間は、日本人程憐れな国民は世界中にたんとあるまいという考に始終圧迫されてならなか

つたが、満州から朝鮮へ渡つて、わが同胞が文明事業の各方面に活躍して大いに優越者となつている状態を目撃して、日本人もはなはだ頼母たのもしい人種だとの印象を深く頭の中に刻みつけられた。

同時に、余は中国人や朝鮮人に生れなくつて、まあ善かつたと思つた。彼等を眼前に置いて勝者の意気込をもつて事に当るわが同胞は、真に運命の寵児ちやうじといわねばならぬ。京城にあるある知人が余にこういつた。東京や横浜では外国人に向つて、ブローケン、イングリッシを話すのが極りが悪くつて弱つたが、この地に来て見ると妙なもので、ブローケンでも何でもすらすら、出るから不思議だ。

——満韓にある同胞諸君の心理はこの一言でその大部分を説明されはしなからうか。

【出典】黒川創「暗殺者たち」（新潮社『新潮』二〇一三年二月号所収）

【編集者注】出典では旧漢字、旧仮名遣い、総ルビになっていますが、ここでは、新漢字、新仮名遣いに改め、ルビは一部の難解文字を除き削除する等の修正を行っています。ただし、送り仮名や当字は、漱石の個性を表すものとして、そのままにしてあります。